

国際通信

Togo
HARAKO

核運搬船が六ヶ月ごとに

日本の港から

WRIのみなさん。数日前、英国船リベン・フィシャー号六〇トンが核廃棄物をのせてホノルル港に入ってきた。

報道によると、その核廃棄物は日本まで積込まれ、再処理のために英国では、同船は、スエズ運河を通過すると過激派の襲撃を受けるかもしれないという危険をさけるため、もう七年間もホノルル経由の航路をとっており、その航海は、はつきりと六ヶ月毎にくりかえされている。

このフィシャー号が私たちの関心となったのは、たまたまホノルル港で事故と暴力行為が起り、放射能汚染が明らかになったからで、同船と同じ使命を持つ船舶が、フィシャー号一隻でないことも明白となった。

市民の眼や世論、政治的抗議や追及をたくみにさけ、一般の眼にふれないように陰べいした核産業と、それに従事協力する船舶を稼働させるための組織、ネットワークがどこかにあることは確定的である。そしてフィシャー号のような時限爆弾をうろつきまわらせているのである。

このフィシャー号問題に関連してその荷主、積荷、契約内容、さら

に日本の原子力発電と核産業の動向などについて、知るかぎりの情報を私たちは求めている。このことを国内の諸運動体にも伝達を。

☆ホノルルH I 九六八一六・一一三
九・九号線四一 Han Y. Lind

ナムビ号—その後

ナムビ号は、ほとんど出航準備完了したが出発の予定がのびている。

この船の積荷の中心は、ナミビアの人たちが求めている書籍で、それらは、南ア政府によって現在持ち込みを禁じられているが、止められているもので、それを彼らに公然と手渡そうというのがこの航海の目的だ。

船は英国ポートマウス港を出て、リスボン・カナリ・アイランズ・ダカル・モンロビア・アツクラ・ラゴ

ス・リーブルウィル・ルアンダ、そして、モカメデスを経由して、数ヶ月かかる。現在、寄港の受け入れは四ヶ所で認可されており、できるだけ紛争をさけるため、なお関係諸国政府と交渉中だ。乗組員を補佐する特別乗組員たちは、ナムビ号に先きまわりして、アフリカ各地の港で、その宣伝をするために出発しはじめた。

英・独・オランダ・ノルウェー・その他国際色ゆたかな各国の男女が乗組みを志望してつめかけている。

FR I号の無線係兼機関士のロイは香港から英国に到着し、必要の場合には、乗組むことになっている。英・仏・デンマーク・オランダ・ベルギー・ノルウェー・オーストラリア・それに英国ではこの企画の宣伝

用、リーフレットやビラが出され、資金が募られている。書籍は、英国経由で続々本部に集められ積込まれている。ナムビ号の出発はヨーロッパ各国はもとより世界的規模を持つ新番組で流されることになっており全航海にわたる報道のためのカメラとフィルムも提供された。また刻々の情報は、短波で規則的に伝えられ船がナミビアに近づく途中で、南アフリカが何をしかけてくるかを、世界の人たちが見守るよう準備されている。

またナムビ号を支持する諸団体は南アフリカが船を止めようとでもしたら、直ちに行動を始められるよう体制をつくりつつある。とくに非暴力直接行動のグループは、過去二十年の経験をこの行動に結集するだろ

う。米仏への核実験抗議、ベトナム反戦運動、ソ連と日本の捕鯨船団への反対抗議など、それは失敗もしたし、成功もした。失敗は核実験と戦争の即時中止であり、成功は状況の解明・選択自由の強調・道徳意識の自覚・敵対者の裏をかくゲリラ、そして彼らの考えを変えることさえやったことだ。

オペレーション・ナミビアへの日本同志の支持を！

宛先 Operation Namibia
5, Caledonian Rd,
所

London N1, England
国際非暴力行進

―軍国主義から解放のための―

イタリー行進で目立った事は、主要道路に近接している兵舎群に近づ

くの止められた時、実に二十五時
間も、路上に坐り込みを続けたこと
であった。行進者はまるで我家のよ
うに警官の足もとで、ゆっくり寝込
んでいた。そして——彼らのこの
「ねばり」の結果、翌日の午后、兵
舎へのデモをついに勝ちとることに
なった。

行進の主力は、八月四日、兵役拒
否者が、服役しているメッツの刑務
所へデモを行った。その晩は、軍事
裁判についての大集会、良心的兵役
拒否、戦争抵抗、それに兵士たちの
集会が開かれた。八月五日、行進は
グラウロツツへ向った。当日の最大
の見世物は、ムウランの歩兵兵舎の
前で、イタリーの同志たちの首頭で
舞踏デモンストレーションが行なわ

れた。

六日は広島デー。行進はリアルに
到着。その夜の集会は、原子力と核
戦争の危険についてであった。

八月七日、行進がドウオモンへ目
指し出発するにつれ、興奮はたかま
った。そこには広大な軍人墓地があ
った。在郷軍人の集団が、行進者を
「墓地荒らし」と呼んで、進入の禁
止を求め、少くともドウオモンの戦
争記念物一切から、行進をしめ出す
ことだと要求した。彼らは「行進者
たちは、戦死者の墓に、小便をかけ
るつもりだ」と書いたアジビラを広
範囲にまいていた。

二二キロ進んだのち、四名ちかい
我々の隊列は停止を余儀なくされた
道は、不吉な黒装束の警官隊で固め
られて、一触即発の危機であった。

朝の集会（毎日全行進者の参加で開
かれるのだが）でえらばれたビエト
ロ・ピンナ（WRI前議長）を含め
た、四人の委員が、地区役人・警察
とねばり強く交渉した。墓地に近づ
くことの禁止決定は、明白に違法で
はあったが、県と警察はどうしても
譲らなかつた。

強行して犠牲者を出すか、がまん
して引下がるか——不本意ながら大多
数の参加者は、後者をとる案を受け
入れることになった。しかし、十二
ヶ国の異った国々からなる国際行進
の性格からして予想していたことな
のだが、いくつかの非難が出た。結
果、数百人が残って、徹底的に論じ
合うことになった。

この日の敗北は、晩の集会でも、

激しく討論された。が、一夜明けた翌日は、気はくにあふれて、ウエルダンへと向った。当夜開かれた一般集会は、都市からの多数の参加者によって、大成功だった。

八月十日、行進はウエルダンの軍事目標を廻った。いままで、この兵舎周辺でのデモは、一切禁止されていた。しかしドウォモンでの試練を経て、断固として固められた行進隊の意志は、もう阻止することができなかった。

ウエルダンから終点サルジニアを目標とした行進は、広範な新聞報道陣にかこまれていた。

この最終日、行進者たちは、サルジニア島への軍が上陸用につくった道路に象徴的なレンガでバリケードを築いた。それから一勢にトキの声を

を上げつつけて、警官隊に市街地へのパレードを許可させたのち、地方住民の人たちへ、訓練された戦闘的非暴力運動について、強い印象を残すデモをくりひろげた。

WRイタリーのバルチオ・ラジカルは、恒例の色彩ゆたかな服装を着用して、禁止にもかかわらず、空軍基地にむかい、野獣的な警官隊の襲撃にも屈せず、ファイナレを飾った。

アメリカ横断徒步行進

南部地域徒步行進は、四月四日、マルチン・ルーサー・キング牧師が殺された日を期して、オルレアンとルイジアナで始まった。三百名あまりが、ルイジアナの一つの町で行進をしたとき、保安官は、二十五名を

拘留、九名を一夜留置、交通防害の罪で起訴した。保安官が言ったことを引用すれば、「行進が進入して、この地域の黒人たちを刺激した」というわけである。行進はその後、大きな波ランもなくミシシッピに到着した。

一方、別の一隊は、コロラドのボルドーを出て、ロックウエル・インターナショナル工場内に進入した。工場は核兵器の「引き金」となるブルトニウムを製造している。そこで数千個の風船を飛ばした時は壮観だった。風船に結びつけた短冊は「この風船をひろったあなたは、ブルトニウムが空中に漏れた時、その被害を受ける恐れがあるロックウエル・インターナショナル工場の影響地帯に住んでいる」と書かれてい

る。

このアメリカ大陸横断徒步行進の第一隊は一九七六年一月二一日、北カルフォルニアの小さな町から約百名の男女が、第一歩を踏み出した。

その目的はアメリカ農村地帯へ挑戦することであり、軍備縮小と社会正義のため、三つのプロパガンダとなる行進をつくり出すことだった。

第一の目的は、軍備縮小問題を、大々的に取り上げ、核戦争の危険性を強調するため特に最初の原爆を被った日本から、日本山妙法寺の僧が五人参加した。第二の目的は、平和が社会正義とつながりを持つということであり、第三の目的は、この問題をできるだけ沢山の小さな町々へ持ち込んでいくことであった。

第二隊は、オレルアンを四月に。

第三隊は、八月六日の広島原爆投下記念日にボストンを出発した。ワシントンへ向って、二十の物資輸送道路が国内を走っている。そして、変革を必要とする数百万のアメリカ国民がその沿線にいる。行進は、行進それ自体によって、またリーフレットや討論や、地方地方のラジオや新聞報道によって、自分たちの町で変革がはじまらなければならぬと、土地の人たちが気付くことの第一歩とならねばならないのである。

十月十六日、大陸横断徒步行進はワシントンに到着し、ワシントンで十五日から十九日にわたり、総括的活動によって終了する予定である。

社会変革をめざす行進

D. MacLeymolze

私は徒步行進にロスアンジェルスで数日、アリゾナで数日参加しただけだ。だがその短時日の間に、忍耐とかねばり強さというものが、どれ程大きくこの大陸横断徒步行進と結びついていくかを、改めて知ることになった。

私達の親の時代のアメリカには、「困難には、すぐ取組め。不可能にはゆっくり時間をかけて対処せよ」という言葉が生きていた。ところが現代の私達は、走ることが出来たらもう決して歩きはしない。自動車で行けたら走らない。ジェット機で行ける所へは自動車では行かない。そのように私達は、忍耐、しんぼうす

ると言うことの出来ない国民になったのだ。一時期、耳目を集めたウエザーマン・アンダーグラウンドの高まりや、SLAなどの出現は、このような急速な変革を追い求める時代の傾向でもあり、早急な結論による所産でもあった。それは、「ウエザーマン」の指導者たちが、戦術の誤りを認めはじめ、SLAが瓦解した今でも、なお暴力革命への信仰として、特に知識人層をひきつけている。彼らが私達の云う「非暴力直接行動」を好まないのは、実は「忍耐」ができずに拒んでいるからであって、それを自己弁護して感傷的だと非難するのである。

知識人達が、己れの立場をガーガーしやべすることは、いつの世の変革運動にもつきものだろう。だがしき

りに武力闘争の勝利として例示する「ベトナム」からうけとるべき真の教訓は、決して武装闘争ではなく、「忍耐」「ねばり」と息の長い政治闘争だということ。ベトナムはその勝利を勝ち取るのに二十九年の長い歳月をかけたということである。しかし、その最期の仕上げが武装力であった—と言うならばそのことによってベトナム国家権力が今後どのように進むかの危惧の基因にもなっている—と言えるだろう。

数日だったが、参加のため私はアリゾナに飛んだ。ジェット機で、一分で行けるところを、行進は休まず歩いて、まる一日かかる。

フエニックスからアルブケルクまで自動車で一日行程のところを、行進は一ヶ月かかった。ハダに炎症を

起し、日照りと雪に焼かれ、シャワーも浴びず、固い土の上で眠る徒歩行である。まさに歩行者のペースで総てが進む。自動車、ヘリ、そして電波を駆使する報道機関には、私たちのことが全くわからないのも当然だ。そして徒步行進のニュースが、ジョニ・ギャルソンショーや深夜放送にほんのちよっぴり登場しても、大多数の国民は親だって聴きもしていないだろう。つまり変革はテレビにはのらない。変革は終りなき道。砂漠を進み岩石地帯を過ぎ草原を歩いて行く。「毒グモ」は身構え「がらがらへび」はとぐろを巻いて待っていた。だが、行進はそれを越えて進み、そして寒さで体が動かない程のこともある。そんなところから変革がはじまるのだ。では、こんな行

進をやって何が出来るというのか。何を变えるのか。報道機関が取り上げていないなら、変革は進んでいないと言うのか。その答は、私たちが知らねばならぬものなのだ。

では昨日の報道の英雄達・レンニは、アビーは、そしてジェリーは何処にいるというのだ。アビー・ホフマンは陰謀し、レンニ・デビスは、ヒンズー僧のあとを追いまわし、ジェリー・ルビンは三十七才になった。もし、徒歩行進が「忍耐」「ねばり」を教える事以上に、何も教えないとしても、真に重大なものを、私たちに教えていると云えはしないか。そしてウキアからワシントンまで歩くことで、世界を変革してしまおうと感

じるものはこの行進に耐えることができず参加しないだろう。それと同

様にもし一日、一週間、一ヶ月行進したことでFBIやCIAがつぶれるとも思っている人達は、家に居た方が良いでしょう。

歩くということとは、教訓であり鍛練であり、それゆえに闘争なのだ。行進は今後さらに何週間も一層苦し

いものになる見込みである。行進を後援し支持する諸団体のとくに責任者に、たとえ教日間でも参加を要請するのは、私にとって当然のことだと考える。私たちが真に社会秩序の変革に真剣であるのなら、いまの自分の職場で、いつまでも安泰で居れるという保証はない。いうまでもなく社会変革は、スポーツを見物して

いるようなものではないのである。

※

南部からの在力をなす、劇的な行

進部隊はまさに軍の狭撃作戦よろしく、ワシントンへと目指している。一方西海岸からの部隊は、北から声をあげて進んでくる。では、いつワシントンに到着するのだろうか。そして行進は、目的を達成するのだろうか。

平和運動は、平和と社会正義のための運動だと、私たちは言い続けてきた。しかし私たちにまだほとんど力が無いと、はっきり言おう。CIAとFBIは、我々の邪魔を可能な限り果そうと、今後も監視活動をするに違いない。だが、今年でもない来年でもない、いつの日か私たちは力を持ち、爆弾ではなく一般の人たちの同意に根をおろし、郵便物、電話、私生活を監視し操作する保安と名乗る権力に対して、反撃してい

るだろう。「やれるうちに、せいぜい写真をとって下さい」と彼らに言う。

と言うのは、FBIの建物がマーティン・ルーサー・キングと名付けられて、社会変革のために使われ、ペンタゴンが国民体育センターに、CIAは解体されて、人の上に人があぐらをかき、ふんぞり返ると言った書類は、一つとして残っていない時を指して、私たちの行進は進んでいる。

※

徒歩行というものは、いかに変革がゆらぐりとやってくるかを、学ぶ方法である。ウィチニ、オースチン、グロウプ、マジスン等の人たちがいま私たちは戦場にあると言った。だがそんな戦場は無い、ということ

をまた徒歩行は教える手段である。たしかにサンフランシスコ・フィラデルフィア・ワシントン・ニューヨークの事務所は戦場ではあるが、変革の中心は、まさに小さな町、大都市の中の小さな地域の中に在る。たとえ一日の内のわずかな時間でも、徒歩行に人々が参加すべきだ、と私たちが言うのは、この理由のためである。

※

(集約) 第一に忍耐、ねばること
を学ぼう。徒歩行はそれ自体、何も変えない。単に問題を提起し、変革への日程を述べるにすぎない。という、私たちは何の支持も得られないかも知れない。が、もしそうだとしたら、私たちはベトナムの人たちから何も学ばなかったことになるし

十年にわたる四つの政府への反対闘争から何の経験も受け取り得なかったこととなる。

第二に、徒歩行は決して安穩なものでない。内外の政治、社会変革、軍縮、人種差別と男女の不平等に対する闘いの中へ、具体的に身を投げ入れる人戦争反対Vの運動だと言うことだ。

第三は、変革の根底は、事務室の中でなく、地方共同体の中に在ると言うことを教えている。私たちが国家的規模で、なしえる最善のことは協力・連帯・奉仕である。権力は人民に在って、幹部に在るのでないと、私たちが知ることである。

第四は、自分のしている事、それがいかに重要なものであるかを、知ることである。私たちはCIAを制

限するのでなく廃止すること。軍備を制限するのでなく、破棄すること。そして現実には、リーガンの様な偏執的対ソ軍備競争にあるのでなく、全地球的の人民の軍備反対の競争であることを知らねばならない。

第五は長距離徒歩行者を含めて、真実な運動というものは、自律的リーダーシップが必要だということ。そしてまた、闘争の現場から超然としてゐる指導者なんて、いない方がよいものだと思ふ。

以上のことに加え、戦争抵抗者連盟(WRL)の仲間には、この徒歩行進の全行程で、私たちアメリカ国民と一緒に日本の仏教僧たちが歩いているということを知ってほしいと思ふ。

米日両国の権力層の人たちは、戦

争を求め、両国の低辺部の人たちは平和を求めている。政府は戦争を起すが、人民だけが平和をつくり出すことが出来る。政府は絶体自己変革をなし得ないが、人民だけがそれをなし得る。WRLが永年にわたって日本の運動と共に築いて来たこの結びつきは両国の国境を越え、広大な大陸と海洋を越えた行動で連帯の実を結ばせるにちがいない。この日本の兄弟たちの参加をして、全世界の人民が強力に連合し、国境を越えた連帯を作り出す最初の結実としなければならぬ。

WRL NEWS 一九八〇

日本の天皇制

ピースニュース十一月号

これは、一億の日本人ばかりでな

く、全世界の人々にも重大なかかわりがあると日本の仲間たちが考えている問題だ。

日本の反動諸勢力は、巧妙な擬装によって、天皇をふたたび絶対的な国民統合の守護神とすることに徐々に成功してきた。

前年の天皇訪米の行事につづいて今回の「ヒロヒトが皇位について五十年目を祝う式典」の陰謀は、細心の慎重さと特別の配慮のうちに発表された。しかし公式には、十一月十日に挙げることを政府はその丁度二ヶ月前に決定した。

一九二六年十二月二五日、当時の天皇ヨシヒトが死んで、息子である皇太子ヒロヒトが皇位を継承した。それから二年後、服喪の期間をすぎた十一月十日に即位式が挙げられた。

若して五十年たったのである。

※

いまここでヒロヒトの罪業を語るのは、私の意志でもなく復しゅうの気持から出たものではない。戦争は終わった。残虐で非人道的な災厄をつくり出した天皇制国家主義に関係した、多くの日本人たちが許されたように、天皇の罪も許されるべきだろう。ただ過去の歴史と事実から学び二度と同じ犯罪をくりかえすことなく、その復活を阻むことにある。

ヒロヒト在位五十年を祝う式典の決定は、現在はいさぐく漠然とした不明瞭な状態で、その志向を直接的に示すものではない。だがそれだからといって坐して彼らの動きを待っているわけにはいかない。何故なら彼ら（ヒロヒト）をとりまく政治権力

）は、たしかに画策しているのだから。……

日本のマスメディアではヒロヒトと呼ばれてにされず、いつも天皇と多くに聞いてみるがよい。今の天皇の名前も知っていない。それほどにヒロヒトは一般の人達から遠く引き離され、年に数回たまにしか公式の住居の囲みから出るにすぎない。その時も彼は数百人の親衛隊の囲みの中にいる。

ヒロヒトは、戦後はただの一回だけ報道人との会見をした。その時戦争責任は少しも感じていないと言った。そして日本国内の世論は、ごく一部をのぞいてそれを容易に通用させる状況にある。その上天皇制に言及する運動は、右翼からの襲撃の心

配があるので、全くみることが出来ない。わずかに、この三年日本語で書いたヒロヒト批判が現われて来ているに過ぎない。

このようななかで、十一月上旬、ヒロヒトと天皇制を問題にした風刺的なステッカーが日本全土に流れ出した。日本国民はそう易々とだまされはしないし、天皇制下でのこの前の冒険による非劇的結末を許してはいないと、権力者どもに意志表示するためであり、その復活に対して今度は、徹底的抵抗を示すことを示したものである。

※

形式的な意味で、日本は自由な国家だし、天皇を批判しようとするどんな人でも、批判できる自由がある。ところがこのステッカーは、まず

印刷してくれる所を配慮するのに、

非常に苦勞しなければならなかった。

その仕事の内容は、最後まで極秘裡にすめられ。全国数百ヶ所の仲間への発送も用心しなければならなかった。そして十一月一日から一週間の間にステッカーは全国一せいで共同行動として、千名以上の人々の手に渡って、街頭に貼付されたのである。

またステッカーの一部は、海外二十数ヶ所におくられた。我々のところにも到着したそれらは、十一月五日から九日までの間に、日本の外交公館関係の周辺に、二回にわたって出現し、見たものを驚かせたはずだ。

すなわちこの行動は、世界中の人々が、このステッカーによる示威で日本の支配層に対し、天皇制復活に對する戦いを開始した意味をもつもの

のである。

☆ サウスチャイナモーニング

ポスト報道記事十一月十日

Police on full alert for terror group

—日本の天皇在位五〇年記念日の今日、香港警察特局と日本総領事館は、厳戒体制をとっている。

香港日本人学校は休校し、その他の日本人センターでは保安自警体制が組織された。日本領事館のほかジエトロや日本航空なども護衛され、とくに日本領事館がある中央区のガモンハウスの周辺は、シヨットガンをもった警官がバトリールをつづけているのがみられる。

日本領事館は次のように語った。「過激派グループがホンコンにいるかもしれないという情報をもっている。」

る。」また警察当局は「そのグループは日本赤軍、西独都市ゲリラのパイダー・マインホフ、バンドそれにジョージ・ハバシュをリーダーとするPFLPからえらばれたメンバーを含んでいる」そして「警察特別局は四人のテロリストが前に香港にいたことがあり、今日もどってくるかもしれないと、月曜日に警告をうけた」

そして九日朝、ガモンハウスの入口に十四枚のステッカーが貼られているのが発見された。

それは天皇ヒロヒトをA級戦犯でアジア人民の大虐殺者と呼んでいる。ステッカーの八枚は北入口でみつかり、六枚は東入口で発見された。これらのうち八枚は日本の警察が調べため、直ちに日本に送られ、他の

六枚は香港警察が調査中である。

当局は「ヒロヒトを攻撃するステッカーは、日本で印刷されたものだ。これと同様のステッカーが伝えられるところによると、昨朝、英本国のロンドンでも発見された」と。

日本領事館は通常、行政事務の二五階に一人、ピサとか貿易関係窓口がある二四階に二人のガードをおいているが、昨日から各階全部に特別ガードをおき、さらに警察は二台のバトカー（一台はガモンハウス前に駐車し、一台は建物のまわりを動いてパトロール）を出動させている。

☆ 同十一月十二日報道記事

なお警戒体制を継続中

日本の天皇ヒロヒトを責めるステ

ッカーが再び出現したため、香港の反テロリスト体制は今日もつづいている。ガモンハウスで発見された十枚と同じステッカーが、昨日午前十時頃、中央区コンノートロードの国際ビルにある日本の三和銀行近くで発見された。

きれいなカラーで印刷されたステッカーは、七五才の天皇をアジア人民の大虐殺者として告発している。ステッカーは警察によって撤去されたが、これと同様のものが過去数日間に、ロンドンでもホルルでも発見されたのである。

香港では、アリス自動小銃、レミントン散弾銃、スターリング機関銃などで重装備した武装警官が動員され、日本領事館、韓国領事館、イスラエル領事館、その他日本関係機関

建物だけでなく、大使の住居も護衛されている。空港もまた厳戒体制にあり、サラセン風の武装運搬車が駐車場にとまり、エブロンや滑走路を警官が物々しくパトロールしている。人間と荷物の特別チェックも、とくにバンコクからの乗客に対して、きびしく実施された。

この体制はすくなくとも明日まで現状のまま続くようだ。その間香港政府と英国との情報交換対策会議が連日開かれる。

政府スポークスマンは、昨日次のように語った。

「これは、政府・警察・軍隊のコミュニケーション・ネットワークをテストするための指揮・管理訓練のひとつである」そして「今回の事件では、これ以上警察や軍隊の動員と

展開はない。それゆえ、一般市民にはもう不便を感じさせないだろう」と。

※

註 現在までに、海外でステッカーが貼付されたことが、はっきりと確認されているのはいまのところこの香港のほか、米、英、仏、ベルギー、オランダ、イタリー、デンマーク、フィンランド、カナダの各都市約二十ヶ所である。各地ではいろいろのやり方が工夫され、なかでもハガキにステッカーを貼り日本の大使館、日本人商社、銀行支店、各新聞社、大学の日本語学科へ送ったというものもあった。また逆輸出で宮城気つけ天皇、皇后、皇太子宛にも出したというから、宮内庁も外国からきたのにはびっくりしただろう。

ワシントンでの劇的な終幕

二十ヶ月にわたる組織作り。三三の州内、二〇の国道を徒歩で九ヶ月間、そしてワシントンめざして、三方からやってきた行進者のうしおのような流れは、十月十六日、リンカン記念堂ではじめて一つに合流した。そのときの、みんなの感激と高揚とは、いつまでも記憶されるにちがいない。だが、この日の行進は全くの見ものであった。はじめ委員会の心配は、予め届出をした参加者数に不足したときのことだった。三方からくる行進団は、その遠近から、ばらばらになって時間をおいて入ってくる。それを理由に警察が行進許可を取消すおそれが確実にあった。

その場合を考えて、世話人の何人かは逮捕を覚悟していた。しかし万事は順調に進んだ。三方からの行進団は、道を時差出発をした。三マイル・七マイル・八マイルのコロンビア地区境からの距離を時速二マイルの速度で、その進路の半分を上って行く行進は映画を見るようだった。進行係を受持ったライフ・センタの人たちは、その調節をうまくやった。

南コースの行進は、原子力核ミサイル潜水艦トライデンの化物を搬んで行く。四百八人の黒人参加者たちは、各人がトライデン潜水艦装備の核兵器を持つ。マックレン監修のもとに製作されたこれ等の兵器は、五二五フィートに及ぶロープと竹ざおにくくりつけて、ジョージ・タウン

を通過した。ディボン・サークルやS・スビーラーに指導されたタバンと人形劇団は、バツハローの群れ、ミシシッピー河の人々、六フイートの高さの竹馬に乗った航空士・数々のブラカードなどを掲げて、サンフランシスコ・ルートに合流、最後の二マイル半の距離を進んで、ホワイハウスを過ぎた。議事堂の構内に入ると、「イエス」と「ノー」の二部隊になって行進する。「ノー」は軍歌、肥えた資本家、死神、「イエス」の方は、やさしい音楽、家畜の群れ、たくさんのお花、太陽と数々の星、高い数十本のさおの先端を真白な小鳥の群れが飛びかう。

三つのコースから出てきた日本人僧りよたち五十名はこの行進に団扇ダイコを連打して、測り知れぬ力を

そえた。リンカン記念堂から一区画手前の所で、三つのコースの部隊はそれぞれ小休止をし、きっかり同時に、記念堂の前に進んできた。そして十分ほどで、その場所一帯は、人、人形、ブラカード、それぞれの団体の旗、横幕などでいっぱいになった。

こうして今は一つに合流した三つの部隊は、ワシントン記念会堂の敷地内のシルワン劇場へと向った。行進参加者は三千に達し、雨のあがった午後を、風の中を進んだ。

「バンと人形」劇団が先頭に立ちその最後尾は国費によって死亡した人々の名前・作戦・戦場を書き記した数々のひつぎがそれに続いた。行進の外側では、印刷物が売られたりニュースや昼食ぬきの人たちにサン

ドイッチが配られた。その夜の映画祭は、ルーテル記念教会で「我が闘い」「ジンバサ最後の墓」「恋愛戦争」などが上映された。

よく日の日曜日、参加者はルーテル記念教会に出かけた。午後二時から六時までの、平和と正義の祭典はワシントンD.C.地区の提供食事で始まった。会場はおよそ一千名の人でいっぱいになった。あるグループは国防省御製作のバイを、FORは風船玉を、ユートピアゲームは屋上で販売。エルスバークたちは経営の売店で、B1爆撃機を一のみにして、学校図書を吐き出す転換マシンをならべるといった具合。その後、翌月曜日の行動に関して討議がなされた。月曜の朝は寒さと雨になやまされたが、天気になった。警官らは私た

ちが道路を歩くのを待期していた。騎馬巡査、護送車、それにうなり声をあげ、齒をむき出している凶暴な警察犬。

私達は歩道をとって橋を渡り、肩すかし作戦をとった。ペンタゴンに近づくにつれ、行進はいっせいに広がり、この怪物の入口、芝生の広場に入り込んだ。ダン・エルスバークは開口一番、激しい口調で彼が勤めていた建物を指さした。小さな集りが棺をかつぎだした。広島に投下した爆弾の模型がそれに続いた。ペンタゴンの入口階段のところで「非暴力宣言」を読みあげる人たちが進んだ。約百名の人たちが、政府の駐車場を横切った時、C・キングは歌いだした。「さあみんな、棺と爆弾を埋めよう」ペンタゴンの傍に埋め

よう。

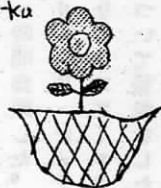
突然、機動隊が近くに駐車していたバスから飛び出し、ペンタゴンへの入口の道をふさいだ。デモ隊は、その地点で停止した。デモ隊は「非暴力宣言」の朗読を始めた。警察は宣言グループ、棺、それに模擬爆弾の検束と押収を開始した。エルスバークも、WRLニュース編集者J・ベック、D・マックレイノル、S・マスナーなど、五一名が逮捕され、尋問のため、アレキサンドリアへ連行された。その間、残った行進参加者たちは、「死の行進」を「生きぬく行進」へと切り変えた。横断幕やプラカードを高く高くかけ、風船を空中高く飛ばせてH D Wを目指して出発した。たまたま黒人ミシシッピ族代表が、彼らの立退き問題に

ついてH U D係官との会見をしている間、私たちはみんなペンタゴンに留まっていた。

行進がホワイトハウスに到着した時、移動ビケットは、政府資金による「人殺し」を物語る劇を披露しながら始まった。FORのB・ハンター、徒步行進長距離参加者の一人S・ラフレーム、南部組織のA・ブレデン、S O L CのB・リー、大陸横断行進のW・レオナルド、日本人仏教僧、佐藤クウイン師と、S・メックハムによる代表団が、ホワイトハウスに入り、国家安全保証顧問J・マルコムと、約一時間会談した。その後、B・リーとW・レオナルドは行進に加わり、ラファイエット公園で、会談について報告をした。（政府当局は今もなお引き続き、爆

弾の愛好家である。その晩、報告
 会が新ペーゼル・バプチスト教会で
 行進長距離参加者と、行進運動の関
 係者のために開かれた。翌日はフレ
 ンド教会の会場で、運動再検討と今
 後の活動についての総括会議が開か
 れ、活動継続のために沢山の意見が
 出され、検討した。その中で最も人
 気の集った二つは、国内をくまなく
 巡回する、平和キャラバン運動であ
 り、一九八一年にモスコウを目指す
 徒步行進であった。」
 (WRL・NEWS十二月号より)
 訳出・WRI外信部・原子

WRI-JAPAN
 Osaka Office
 % kou MUKAI
 2-12-2, Asahi machi, Abe
 -no-ku



Osaka, Japan

☆ 自由連合、四つの意味

自由連合は、オ一に△他者との関係の在り方Vである
 △自分を外へむけて開くV在り方において、自分の方か
 ら多くの人たちの△仲間になるVことである。

オ二に、△その関係のとらえ方Vである。とらえ方と
 して△自己の想像力を個別直接の対象にとどめるのでな
 く、そこからはじまる無限の連鎖Vにおいて、多くの人
 たちを自分の△仲間にするVことである。

オ三に、そのような△仲間関係の積極的な意識化Vと
 その意識化がもたらす△ものの見方、関係の変化に併う
 自己革命―見えてくる世界の一変である。

オ四に、この自他の仲間総体の動き、つながり方、い
 わば生き方として明らかになってくる日常のなかの行為
 における手続き、技術の共同性、その進展のうえに出て
 くる△社会革命の可視化Vである。

即ち―自由連合は、イ 仲間を自分の方へ引きよせる
 のではなく、自らを仲間へと投げかける外延的連合にお
 いてつくる他者との関係。 ロ 仲間の場へ自分をおも
 むかせることで自分を開きながら、仲間へ同化するの
 ではない自己主体の相互性。―だから自由連合は、仲間に
 必ず自己が受けとめられる確かさによって、成立するの
 ではない。(創刊号△合言葉Vの意味、より抄)

